The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	在韓日本人妻のエスニシティをめぐるアイデンティティ・ポリティックス
Author(s)	竹村, 博恵
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2019, 2018, p. 27-36
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/72841
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

在韓日本人妻のエスニシティをめぐるアイデンティティ・ポリティックス

竹村　博恵

1.　はじめに

韓国では、2006 年に政府が結婚移住女性に対する社会統合支援対策を発表した前後から、結婚移民女性本人や彼女たちの韓国人配偶者とその子供から構成される多文化家族を対象とした学術的な研究が爆発的に増加し多文化ブームが巻き起こった（金侖貞 2009, 李善姫 2011）。しかしながら、韓国の在韓日本人妻に関する先行研究においては、彼女たちを「日本国籍と日本名を維持し、恒常的で同一な日本文化的特徴を持ち、韓国社会の中でも日本人として生きている女性」として位置づけるもの（김석란 2008, 노지영/정진경/정혜온/박정의 2014）や、日本と韓国の狭間で日韓「ハーフ」である我が子を育てる彼女たちを「（日本人でありながら）韓国人の母親」という混淆的アイデンティティを形成しながら奮闘している存在として位置づけるもの（이지선/천혜정 2008,민서정 2013）などが見受けられ、韓国人である我々（우리）と日本人である在韓日本人妻という二項対立の図式、つまり、韓国と日本というナショナリティに特化した二項対立の図式が前景化される傾向が見られる。雀（丸川 2005）は、ポストコロニアルの朝鮮半島へ日本から移住した人々が置かれる空間をディアスポラ空間と称し、そこでは日本と韓国の間に存在する歴史的な問題ゆえに「日本人」のアイデンティティやシティズンシップが問題視されざるを得ないと指摘している。確かに在韓日本人妻たちが日本人であることは事実であるが、それは彼女たちの一部であって全てではない。彼女たちは、韓国人の夫を持つ妻、日本と韓国の狭間で生きる子供の母、嫁など、日本人であること以外にも様々なアイデンティを生きている。エスニック・マイノリティである移民の人々のアイデンティティの多様性に注目せず一方的に「〇〇人」という単一のカテゴリーで囲い込もうとするエスニック・マジョリティの圧力は、彼ら・彼女たちのハイブリッドなエスニック・アイデンティティを束縛し自己表現の自由を奪う危険性がある（宇田川 2006, 戴 1999, 2005, 2014, ホール 2000 など）。

上記の内容を踏まえ、本稿では、韓国社会の中でエスニック・マイノリティである在韓日本人妻たちが、エスニック・マジョリティ（韓国人）によって普遍で固定された文化的特徴を持つ日本人として位置づけられようとする際にどのようなアイデンティティの交渉を行っているのか、そして韓国と自分たちの間の社会的関係性をどのように捉えているのかについて、彼女たちへのインタビュー調査の中に現れたスモール・ストーリーをもとに分析する。そのために、①語りにおける韓国人との社会的な接触場面の再現の中で、在韓日本人妻たちが自らのエスニック・アイデンティティの混淆性をどのように構築・表出するのか、②彼女たちが韓国と自分たちの間の社会的関係性をどのように捉えているのか、という二つのリサーチ・クエスチョンを揚げ、それについて議論する。

2.　分析の枠組み

2.1 インタビュー・ナラティブ

ナラティブは様々な学問分野で研究対象とされておりその定義も多様であるが、本稿ではナラティブを独立した単体のテクストとしてではなく社会的実践として捉え、ナラティブの中で描き出されるアイデンティティとは流動的で暫定的なものであり、語り手はナラティブを語ることを

通して「その時その場で自分自身と関わっている特定の他者に対し自分が何者であるのか（そして何者でないのか）を提示している」（リースマン 2014:15）と考える。また、本稿では、ホルスタイン & グブリアム（2004）が提唱したアクティヴ・インタビューの視点を支持し、インタビューとはインタビュアーとインタビュイーが協働で現実を構築し意味を作り出す場面であると捉える。リースマン（2014）は、インタビューに参加するインタビュアーとインタビュイーは、質問をして「催促する」調査者と答えを出す入れ物のような「回答者」という関係ではなく、協働してナラティブと意味とを構築する能動的な参加者同士であると述べている（リースマン 2014:45）。本稿では、インタビューを参加者が協働でアイデンティティの構築に関与する場として捉え、インタビュー・ナラティブを「インタビュアーも含む「今・ここ」を構成する参与者間の相互行為によって成立するもの」（秦 2013:251）として定義する。

2.2 スモール・ストーリー

Bamberg（2004）と Georgakopoulou（2007）は、アイデンティティ研究において、ある程度の長さのある個人的な過去の経験談のナラティブが特権的に扱われていることを受け、ナラティブの標準（canon）から逸脱したストーリーであっても、そこにナラティブ性／ナラティブ指向性さえ存在するのであればそれはアイデンティティ研究の対象となりうると指摘し、スモール・ストーリーの有用性を明らかにした（Bamberg 2004, Georgakopoulou 2007, Bamberg & Georgakopoulou 2008）。イェルガコポロ(2013)は、「「スモール・ストーリー」は、現在進行中の出来事、未来や仮定の出来事、共有されている、あるいはすでに周知の出来事を語ること、以前言ったことをほのめかすこと、語りを据え置くこと、また語るのを拒否することなど、会話の文脈において頻度が高く、目立つナラティブ行動の全域を捉える包括的な用語である」（イェルガコポロ 2013:24）と説明している。Georgakopoulou（2007）は、会話の中にあらわれるスモール・ストーリーに着目することで、日常的な会話の中で、局所的にミクロで多様なアイデンティティが実践的に構築されていく過程を観察することができる（Georgakopoulou 2007:115）と述べている。

2.3 引用

社会言語学者である Tannen（2007）によれば、ナラティブの中にあらわれる引用は、それを話したと思われる人物によって実際に話されたものではなく創造されたものである（Tannen 2007:112）。Tannen は、バフチン（1979:99-114）が文学作品の中で指摘した多声性の概念を一般的な会話の中にも適応できるとし、会話の中で使用される直接引用も過去の発言の再現ではなく、語り手による多声性を帯びた創造物“Constructed dialogue”（Tannen 2007:103）であると指摘している（Tannen 2007:105）。鎌田（2000）は、Tannen（2007）の “Constructed dialogue”（Tannen 2007:103）という引用の捉え方を支持し、日本語の引用表現にも同じことが言えるとして引用句創造説[1]（鎌田 2000:60）を唱えた。Tannen（2007）や鎌田（2000）が指摘する引用表現の創造性は、単なる発話の表面上の意味の伝達のために使用されるツールとしてだけではない

---

1 鎌田は、日本語の引用表現は、元々のメッセージを新たな伝達の場においてどのように表現したいかという伝達者の表現意図に応じて決まるもの（鎌田 2000:60-61）と述べ、元の発話と似せたものを「一卵性直接引用」（鎌田 2000:62）、似ていないものを「二卵性直接引用」（鎌田 2000:62）と名付けている。鎌田（2000）によると、引用表現が元の発話と似ていない「二卵性直接引用」（鎌田 2000:62）の場合、そこに引き継がれているものは、元の発話に込められた意図に対する語り手自身の解釈と、元の発話の持つ発話内行為（illocutionary act）である。

引用表現の可能性を示唆している。バフチン（1979）によれば、小説の登場人物とは程度の差はあれ常にイデオローグであり、彼ら・彼女たちが話す言葉はイデオロギー素[2]である（バフチン 1979:137-138）。つまり、小説の中にあらわれる引用表現は、常に世界に対する作者の固有な視点を反映し、社会的意義の獲得を志向しており（バフチン 1979:137-138）、そのような引用表現の性質は口述の語りの中においても同様であると考えられる（Tannen 2007:103）。

3. インタビュー・データ

本稿で使用するデータは、2019年の2月に韓国で実施した在韓日本人妻4名へのインタビュー調査の一部である。インタビューは、友人同士であるインタビュイー2名と、インタビュアー1名の3名を1組として2組実施した。1組はソウルで、もう1組は釜山からバスで2時間ほどの地方都市麗水（ヨス）で行った。調査の様子は、インタビュイーの同意のもと録画録音した。本稿で取り上げるのは、2組のうちの麗水で実施したインタビュー調査の内容である。

氏名[3]	年齢	在韓歴	職業	子供の数
ユリカ	33歳	6年（2013年[4]）	専業主婦	1（男）
マユミ	35歳	8年（2011年）	専業主婦	3（男）
調査者	36歳	6年（2013年）	学生	1（女）

表1. インタビュイーの基本情報

インタビュイーの一人であるマユミは、インタビュアーの韓国の大学院時代からの友人である。2011年に韓国に移住し滞在歴は8年になる。韓国人の夫とは日韓の交流会で出会い恋愛を経て結婚、現在は韓国で3人の息子（3歳の双子と0歳）を育てている。仕事はしておらず、本人曰く現在の韓国生活の中心は子育てである。一年のうちに数回子供の日本語環境のこともあり数週間から1ヶ月ほど日本に帰国している。ユリカは、マユミの友人であり、現在1歳になる息子がいる。韓国には2013年に移住してきており滞在歴は6年になる。ソウルの大学に留学中に同じ大学の学生であった韓国人の夫と出会い恋愛を経て結婚した。結婚を機に韓国に移住し、夫の仕事の関係で麗水に住むこととなる。麗水に移住後韓国で大学院に通い、卒業してからは専業主婦をしながら子育てをしている。マユミとはブログを介して知り合う。

インタビューは麗水のマユミの自宅で実施された。ユリカとマユミは子連れで出会うこともあり、ユリカにとってマユミの家は親しい友人の自宅であり親しみを持てる場所である。ユリカとインタビュアーは初対面であったが、同じ在韓日本人妻／韓国で子育てをする母親／韓国で大学院に通ったもの同士／夫の出身大学が同じ／韓国語を勉強した語学学校が同じといった共通点をもとにラポールを構築していった。なお、インタビュー調査を依頼する際に子供を同席させても問題はないと伝えていたので、子供2人（マユミの0歳の息子とユリカの息子）もインタビュー調査をするときには同じ空間で自由に遊んでいた。

---

2 「バフチンの言語論では、具体的な状況のもとにおかれた言表は、常にイデオロギー的な意味の単位である。ここで<イデオロギー素>という用語は、そのようなイデオロギー的な単位としての話者の言葉を指している（伊藤一郎(1979:105)/バフチン(1979)訳者)」

3 表1に記載するインタビュイーの氏名はどちらとも仮名である。

4 韓国に移住してきた年代。

4. 分析と考察（インタビュー・ナラティブにおけるスモール・ストーリー）

4.1 のスモール・ストーリーがでてくる前、調査者が「韓国人と国際結婚をした私」という立ち位置から、韓国で我が子と日本語を話すときや日本で子供や韓国人配偶者と韓国語を話すときになぜか周りの目が気になるという話をする。調査者の発言に対しマユミは「日韓ハーフの子供を持つ母親」の立ち位置から、周りの目が気になってしまうのは、見た目だけならわからないのに外国語を話す母親のせいで子供がハーフであることが周囲にバレてしまい、そのことが子供の足を引っ張ってしまうことになるのではと不安になるためではないかと指摘する。これらの二人のやりとりに続いてユリカが「でもわたしも…」と話し始めたのが 4.1 の 1 行目である。

4.1 スモール・ストーリー 1：“一人でここで奮闘しているママなのよ”（25-34 行目）

1　ユリカ：　でもわたしも＝
2　マユミ：　@@@
3　ユリカ：　＝あの：タクシーの中では：(..)
4　　息子と堂々と日本語じゃ↑(.)にっ日本語で話せませんもん
5　マユミ：　あっわかるわかる：
6　ユリカ：　[1でもありますよね?
7　マユミ：　[1でも子どもたちが話し始める↑と↓：(.) 急にそこっ (.) 切り替わるんですよ
8　調査者：　(1) [2え?
9　マユミ：　[2わたしもひとり↑で：[3乗るとき↑は：
10　ユリカ：　[3もうおわった? (.) (子供に対して)
11　　[4お菓子?
12　マユミ：　[4例えば電話とかでも：にっ日本語：：とかきても出たくない
13　調査者：　おう
14　マユミ：　旦那からからかかってきて＞いつも日本語でしゃべってるの↑に：＜
15　　(1) くれそっ (.) ↑어：↑어：とかって韓国語で出るんですよ＝
16　調査者：　[5↑ん：
17　マユミ：　＝[5でも子どもたちがしゃべってる↓と：
18　　(1) まあ↑日本語じゃないですか?
19　→　お母さんお母さん言うから
20　　もうそしたら (.) その瞬間か↑ら：(..) ↑す：：ごいもう堂々とわたし↑は
21　→　日本人で (.) 一人でここで奮闘しているママなのよっみたい↑な：
22　調査者：　↑えええ：：
23　マユミ：　雰囲気が：出るんです↑よ (.) 不思議でっ (1) 不思議と
24　調査者：　(1) あ [6だめだ私も
25　→　マユミ：　[6でなんか↑大変でしょ?みたい↑な：
26　→　なんか (.) お：↑おっ (.) なん↑か (..)
27　→　↑おっ (.) がいこっ (.) ↑日本人だね?
28　　みたいなこと (.) タクシーのうんちゃんとかにも言われる [7と：
29　調査者：　[7うんうん

30　　ユリカ：　[8これで遊ばない?ママと（子供に対して）
31　→　マユミ：　[8ああ:そうなんですよ：みたいな
32　→　　大変です↑よ：：とか
33　　＞¥-いろ↑いろ-¥（.）＜会話（..）↑すらしちゃう?：(.）感じ↑が：h
34　　（.）¥-自分でも不思議だ↑な：：って思いますもん-¥
35　　調査者：　[H ああ H] わたしもそれみならわないとな↑
36　　ユリカ：　@@@@

上記のデータ 1-4 行目でユリカは「でもわたしも」から始まる発言を通して、4.1 のスモール・ストーリーが開始される前になされた調査者の「韓国人男性と国際結婚をした私」の立ち位置での語りの内容と類似した体験が自分にもあること、自分が調査者と同じ経験を共有する共一成員であることを提示している（安井 2012[5]）。それに対し、マユミは 5 行目で「あっわかるわかる」と同意を示すが、6 行目のユリカの問いかけに対し 7 行目で「でも子供たちが話し始めると…」と切り返すことで、立ち位置を「韓国人男性と国際結婚をした私」から再度「母親」へと変更する。マユミの発言に調査者が説明を求めて「え？」(9) と聞き返すと、マユミはまず自分が一人でタクシーに乗った場合のスモール・ストーリーを話し始め（9-15 行目）、「韓国人男性と国際結婚をした私」の立ち位置からの語りを披露する。ここでマユミは、一人でタクシーに乗っている時にかかってきた韓国人の夫からの電話に対しわざわざ韓国語で受け答えをする自身の姿を直接引用「어：↑어：↑」(15) を挿入しながら提示することで、自分が 5 行目でエリカの発言に対し「わかるわかる」と同意できた根拠を示す。それに続く 17 行目以降は、前の語りと対比するようにして子供とタクシーに乗った場合のスモール・ストーリーが「母親」の立ち位置から語られる。子供の「お母さんお母さん」(19) という日本語での呼びかけを間接引用で挿入し、20 行目からはその発言を受けてマユミの中に沸き起こる心情が心内発話の直接引用を使用して生き生きと表現される。マユミは、一人の時は日本人であることを隠そうとしていた自分が、子供の発言によりそれを隠し通せなくなった途端、前件とは対照的に「堂々と」(20) 自分は「日本人」(21) で「一人でここで奮闘しているママ」(21) なのだという雰囲気を出すのだと述べる。特徴的なのは、21 行目でマユミが自分の思考について言及する際に、日本人でという部分は普通に話し、その後ポーズを置いてから、声色を変え「一人でここで奮闘しているママなのよ」と直接引用の形で心内発話を提示している部分である。マユミはここで、この状況下で自分が堂々と自らの声で直接主張したいことは、日本人である自分ではなく韓国で一人で奮闘しながら子育てをしている母親としての自分なのだということを個人的な自分の心の声を直接引用で引いてくることにより伝えようとしているのではないだろうか。そのようなマユミの姿勢は、26 行目から始まるスモール・ストーリーの中にも同じようにあらわれている。まず、マユミはスモール・ストーリーを開始する前に、25 行目で「大変でしょ？」という自分の心内発話の直接引用を大きめの声で発言し挿入している。ここでマユミが言う大変さとは、彼女自身が 21 行目において韓国で子育てする自分の様子を「奮闘」という言葉で表現していることからもわかるように、韓国で一人で 3 人の息

5 安井（2012）は、会話の中で接続詞「でも」の後に話し手への理解や共感が示される行為が続く場面を分析し、「でも」の後に『類似体験』が語られる場合や、『わかる』といった理解を示す発言が続く場合、聞き手は自分にも同様の悩みがあることを示すことで共一成員性を示したり、語られた内容は特異なものではないという態度を示すことにより自分の弱点（悩み）を示した話し手のばつの悪さや恥ずかしさを軽減したりしていると述べている（安井 2012:100）。

子の子育てをしている自らの状況に対する主張であると考えられる。その後 26 行目からは、子供がタクシーの中で日本語を話したために自分が日本人であることがバレてしまい、それに対するタクシー運転手の反応が描かれる。26, 27 行目で提示される直接引用（「お：↑おっ（.）なん↑か（..）↑おっ（.）がいこっ（.）↑日本人だね?」）では、本来ならば韓国語でなされたと考えられる運転手の発言が日本語で提示されている。15 行目でマユミは自分の発話を韓国語のまま直接引用で表現しているが、ここでのタクシー運転手の発話に関しては日本語で表現している。これは、この発話が Tannen（2007）や鎌田（2000）が指摘するように、マユミの創造物であり、この発話の中には韓国人と自分との間の関係性に関するマユミ自身の解釈が含意されていると考えられる。日本語を話したマユミを、外国人という大きな枠組みではなく、さらに狭い日本人という枠組みの中にカテゴライズしようとするタクシー運転手の発言は「日本人だね?」（27）という発話の文末にくる断定の「だ」（森田 2007）と自分の疑問に対して同意を求める「ね」（西郷 2012）からも感じられる。それに対しマユミは「ああ:そうなんですよ：」（31）と言いながら自分が日本人であることを一旦認め、直後の 32 行目で「大変です↑よ：：」と発言している。32 行目で、マユミは何が大変なのかについての具体的なコメントはしていないが、このスモール・ストーリーが開始される前にも、マユミは心内発話の直接引用を使用して韓国で子育てする自分自身は大変であるという主張を行っており（25）、32 行目の「大変ですよ」は韓国で一人で育児を行う大変さに対するマユミの主張であると推測できる。つまり、ここでマユミは「母親」としての立ち位置から大変さを主張することで「日本人」としての自分を後景化させつつ、「一人でここで奮闘しているママ」という母親アイデンティティを前面に押し出していると考えられる。マユミは、インタビューの中で、現在の自分の生活の中心は子育てであると述べており、現在彼女の中では母親アイデンティティが重要な位置を占めていることがうかがわれる。26-34 行目で描かれる韓国人のタクシー運転手とのやりとりには、日本語を話した途端、自分の担う様々なアイデンティティが日本人というナショナル・アイデンティティによって抑圧される[6]状況に対し、今現在自らの中で重要度が高いと自身が思っている母親アイデンティティを提示しながら交渉するマユミの様子があらわれている。

4.2 スモール・ストーリー 2：“あれ、日本人なの？”（76）

4.1 のやりとりの後、「韓国人男性と国際結婚をした私」という立ち位置であれ、「日韓ハーフの子供を持つ母親」という立ち位置であれ、韓国で日本語を話すときにコソコソしてしまうのは何故なのだろうかということで 3 人が話し合う。調査者が誰に対してでもなく、そのような現象がどうして起こるのだろうかと呟いたのに対し、65 行目からのマユミが自身の考えを述べ始める。

65　マユミ：　↑なんか↑入り口↑が：
66　調査者：　（2）[1↓ん：：
67　マユミ：　[1なんか（.）入り口がその（..）

---

6 宇田川（2006）は、たとえば民族アイデンティティのもとではしばしば女性アイデンティティが無効化されてしまうように、一つのアイデンティティによって他のアイデンティティが抑圧されるということも起こる（宇田川 2006:460）と述べ、特にナショナル・アイデンティティをはじめとした集団的アイデンティティの場合、その内部はあたかも均質・同質であるかのようにみなされる傾向があるが、同じ民族や同じ性であってもその内部は多様であり、本質的なアイデンティティという考え方は各個人にとっても大きな負担となるだけでなく、ある個人を常にそのアイデンティティの枠内に規定し、他のアイデンティティのあり方の可能性を閉じてしまう（宇田川 2006:460-461）と指摘している。

68　　↑**スタート**がこ↑う（..）
69　　引き戻され↑る感じが゜して゜
70　調査者：　[2え
71　マユミ：　[2もしそうじゃなかっ韓国語であれ↑ば：
72　　そっから（.）次にスタートするの↓に：
73　→　　（1）[3今何歳なの?と↑か:
74　ユリカ：　　[3うん
75　調査者：　うん：
76　→　マユミ：　なに今からどっかいくの?とかなんのに
77　　＞**日本語**になった瞬間に＜
78　→　　あれ日本人なの?（1）からスタートしなきゃいけないのがすっごい
79　調査者：　↑ん：：：
80　ユリカ：　めんどくさい [4ですよね
81　マユミ：　　[4めんどくさい
82　ユリカ：　うんうん
83　　それ[5なんかわかるかも
84　マユミ：　　[5別に**そこま↑で**：
85　　＞なんかそれで＜日本人だからやだとか＝
86　調査者：　　[6↑ん：：：
87　マユミ：　＝[6そういうのんじゃないかもしれないですもしかしたら
88　　なんか言われるからいやだと↑か：
89　調査者：　[7↑ん：
90　マユミ：　[7そう↑いうのはあんま↑り：
91　調査者：　[8↑ん：：：：：：
92　マユミ：　[8私は：今はあまり感じてなくて:
93　　（.）反日だったらどうしようとか
94　調査者：　↑ん：↑ん：↑ん：[9↑ん：
95　マユミ：　　[9そ↑ういうのは
96　ユリカ：　↓ん：：：：
97　マユミ：　（1）↑あんま↑り：ないかもしれない
98　調査者：　[10↑ん：：：
99　マユミ：　[10だから外国人と言うだけ↑で：いちいち（..）もどされ↓て：（ため息をつくように）
100　→　　外国がどう↓の（.）**韓国はどう↓の…**
101　調査者：　（1）[11↑あ：なるほど↑ね：：
102　マユミ：　　[11みたいな…
103　　言われるのもめんどくさい
104　ユリカ：　ん：めんどくさい確かに（ポツンとつぶやくように）
105　調査者：　（2）↑あ：：なるほどなるほ↑ど：

スモール・ストーリー 2 は、77-78 行目で韓国人のタクシー運転手の声が直接引用で挿入され

ている部分である。ここでは、声音を変えた直接引用を挿入することにより、マユミが日本人であることに運転手が気づいていない場合に行われそうなやりとり（「今何歳なの?」(73)「なに今からどっか行くの?」(76)）と、気づいた後のやりとり（「あれ日本人なの?」(78)）の両方が対比される形で提示されている。タクシー運転手の声の調子も対照的で、73,76 行目は笑いを含んだような柔らかい調子であるのに対し、78 行目では怪訝そうに問いかける声音で表現されている。4.1 でも言及したように、タクシー運転手は韓国人であり、本来ならば韓国語を話していると考えられるが、マユミの直接引用はここでも全て日本語で表現されており、韓国社会や韓国人から自らがどのように見られ・扱われているかに対するマユミ自身の解釈がこれらの引用表現にも含意されていると考えられる。また、マユミは、このようなタクシー運転手の対応の変化に対し、日本語を喋ることで「スタートが引き戻される」(68,69 行目）感覚がすると述べる。77,78 行目のスモール・ストーリーは、マユミがいう「スタートが引き戻される」という感覚がどのようなものなのかを、実際のタクシー運転手とのやりとりを直接引用を使用しながら描きだすことで具体的に例示している。また、このマユミのスモール・ストーリーに対して、マユミ自身よりも早く、聞き手であったユリカが 80 行目で「めんどくさいですよね」という評価を下している。78 行目のマユミの発言は「スタートしなきゃいけないのがすっごい」という中途半端な状態で中断されているが、発話の内容を見る限り、マユミは「すっごい」の後にこのような状況に対する自身の評価を述べようとしていたのではないかと推察される。ユリカの 80 行目の発言はマユミ自身の評価に対する先取り[7]であり、これによりユリカはマユミがこのスモール・ストーリーを通して表現したかった心情を自らも理解している・共感しているという姿勢を提示しているのではないだろうか。マユミも、81 行目でユリカの「めんどくさい」という発言を繰り返すことでそれを承認し、ユリカもそれを受けて 82 行目で「うんうん、それなんかわかるかも」と自分がマユミの心情に理解と共感を抱いていることを再度明確に言語化している。ユリカの共感と理解を得たマユミは、84 行目から、自分が日本人であることが露見するという状況に対して、「日本人だからやだ」(85)「なんか言われるからいやだ」(88)「反日だったらどうしよう」(93）というような不安感が沸き起こるというよりも、「外国人というだけでいちいち戻され」(99)、「外国がどうの…韓国はどうの…」(100)、というようなことを言われるめんどくささ」(103）を感じると述べる。100 行目で挿入される引用表現は、タクシー運転手のものかどうかは不明であるが、99 行目でマユミが自身のことを「外国人」と位置づけている点、また、外国に対しては「が[8]」、韓国に対しては「は」が使用されている点、「韓国は」という発言が「外国が」よりも強調して言われている点などから、この引用表現の発話者が外国人であるマユミに対して「外国がどうの…、韓国はどうの…」と発言する韓国人を象徴していると考えられる。ここで表現されているのは、普段の生活の中で、韓国人と自分との間に「韓国人である我々（우리）と外国人である移民」という二項対立の図式が存在していることを感じているマユミの見解であり、同時に、日本人としてのナショナル・アイデンティティに注目する韓国人に対し（78）自分自身を「外国人」と位置づける（99）ことで、アイデンティティの交渉を行うマユミの姿勢である。さらに、103 行目のマユミの「め

---

7 田中（1998）は、＜先取り＞を、相手に対し「相手の発話内容を予測できている」という信号を送ることであるとする。また、この信号が「相手の言いたいことをよく理解している」という好意的な心情とともに相手に伝わることにより、＜先取り＞をした側にもされた側にも、自分たちは互いにわかり合っているという一体感が生じることがあると述べている（田中 1998:35)。

8 松本（2016）は、情報の送り手は伝達意図に応じて「は／が」を選択し、受け手はそれらに託された伝達意図を感知し心象を形成すると述べている。松本によれば、「は」は主観的な「寄り」の映像、「が」は客観的な「引き」の映像と共通した効果を生む（松本 2016:98-99)。

んどくさい」という発言を受け、104 行目でそれを聞いていたユリカが、動き回る息子を追いかけながら独り言のように「ん：めんどくさい確かに」と発言している。ここでは、80-83 行目で行われたやりとりがマユミとユリカの順番を反対にした状態で再現されており、マユミが伝えようとする“めんどくささ”をユリカも同様に韓国生活の中で感じているということが再度提示され、マユミとユリカ 2 人の間で共有されている。

5. 結語

本稿では、二つのインタビュー・データを元に、エスニック・マイノリティである在韓日本人女性たちが、エスニック・マジョリティである韓国人との間でどのようなアイデンティティの交渉を行っているのか、また自分たちと韓国社会との関係性をどのように捉えているのかについて検証した。彼女たちのスモール・ストーリーからは、韓国社会との接触の中で彼女たちを日本人というナショナル・アイデンティティへ拘束しようとするホスト側に対し、抑圧されたことにより自らの中に前景化してきた他のアイデンティティを提示しながら交渉する様子や、常に韓国人と日本人という立ち位置から関係性を構築しようとするホスト側に対し煩わしさを感じる様子などが見て取れた。自分たちのアイデンティティを構築するために必要な「他者」として、ホスト側がマイノリティ側のアイデンティティを一方的に固定化し彼ら・彼女たちをそこに拘束することは、自分たちのアイデンティティの政治にマイノリティの人々を巻き込んで利用することに他ならない（鄭朕惠 2005:206）。マイノリティの人々のエスニック・アイデンティティとは、ホスト側によって与えられるものではなく彼ら・彼女たちが能動的に選び取っていくものであり、そのような中で生み出される重層的なエスニック・アイデンティティに目を向けることが本当の意味での多様性の理解につながっていくのではないだろうか。今後は、在韓日本人妻たちが実際に韓国社会の中でどのように表象されているのかについても同時に検証しつつ、韓国と日本の狭間で生きる彼女たちのハイブリッドなエスニック・アイデンティティがどのようなものなのかについて、それが構築される場との関係性も考慮に入れながら詳察していきたい。

参考文献

Bamberg, Michael（2004）Talk, small stories, and adolescent identities. *Human Development*, vol.47, pp.331-353.

Bamberg, Michael and Georgakopoulou, Alexandra (2008) Small stories as a new perspective in narrative and identity analysis. *Text and Talk*, vol.28(3), pp.377-396

Georgakopoulou, Alexandra（2007）*Small Stories, Interaction and Identities (Studies in Narrative)*, John Benjamins Pub Co.

Tannen, Debora（2007）*Talking Voices: Dialogue, and Imagery in Conversational Discourse. (Studies in Interactional Sociolinguistics)*, Cambridge: Cambridge University Press.

イェルガコポロ，アレクサンドラ (2013)「ナラティブ分析」(佐藤彰・秦かおり編)『ナラティブ研究の最前線 −人は語ることで何をなすのか』，pp.1-42，ひつじ書房

宇田川妙子（2006）「アイデンティティ概念の再構築の試み：イタリア人アイデンティティという事例とともに」，『国立民族学博物館研究報告』，vol.30 isuue.4，pp.455-492，国立民族博物館

鎌田修（2000）『日本語の引用』　ひつじ書房

金侖貞（2009）「韓国における多文化共生社会に向けての多文化政策の形成」『人文学報』，vol.411，首都大学東京都市教養学部人文・社会系

西郷英樹(2012)「終助詞「ね」「よ」「よね」の発話連鎖効力に関する一考察：談話完成タスク結果を基に」『関西外国語大学留学生別科日本語教育論集』，vol.22，pp.97−−118，関西外国語大学留学生別科

戴エイカ（1999）『多文化主義とディアスポラ』，明石書店

(2005)「特定課題研究 「多文化共生」と「日本人」--「文化」と「共生」の再検証 (特集=異文化間教育研究と「日本人性」)」『異文化間教育』, vol.22, pp.27-41, 異文化間教育学会

(2014)「越境移動をどう捉えるか：ディアスポラの視点」『Peace and culture』, vol.6(1), pp.139-148, 青山学院大学国際交流共同研究センター

田中妙子（1998)「会話における先取りについて」『早稲田大学日本語研究教育センター紀要』, vol.10, pp.17-40, 早稲田大学

鄭朕惠（2005)「言語化されずに身体化された記憶と、複合的アイデンティティ」, 上野千鶴子（編)『脱アイデンティティ』, pp.199-240, 勁草書房

秦かおり（2013)「「何となく合意」の舞台裏 -インタビュー・ナラティブにみる規範意識の表出と交渉のストラテジー」 (佐藤彰・秦かおり編)『ナラティブ研究の最前線 -人は語ることで何をなすのか』, pp.247-271, ひつじ書房

朴源花（2017)「韓国における多文化主義の展開：「人権」と「ナショナル・アイデンティティ」の議論を通じて：富士ゼロックス株式会社小林基金 2015 年度研究助成論文」 『富士ゼロックス株式会社小林基金 編』 富士ゼロックス小林基金

ホルスタイン J.A.・J.F. グブリウム 山田富秋他訳（2004)『アクティヴ・インタビュー：相互行為としての社会調査』 せりか書房

ホール, スチュアート (2000) 「誰がアイデンティティを必要とするのか？」(宇波彰訳)『カルチュラル・アイデンティティの諸問題―誰がアイデンティティを必要とするのか?』大村書店

松本隆（2016)「反転可能な「は」と「が」による心象の描き分け―文芸作品における表現技法としての「は／が」選択―」『清泉女子大学人文科学研究所紀要』, vol.37, pp.95-110, 清泉女子大学人文科学研究所

丸川哲史／崔泰源／洪宗郁／崔真碩／胡冬竹（2005)「『東アジア』のために-脱冷戦とグローバリズムの中で」『世界』, 2 月号, pp.296-305, 岩波書店

ミハイル・バフチン 伊藤東一郎訳（1979)『小説の言葉 -ミハイル・バフチン著作集５』 新時代社

森田良行(2007)『助詞・助動詞の辞典』東京堂出版

李善姫（2011)「韓国における「多文化主義」の背景と地域社会の対応」『GEMC journal：グローバル時代の男女共同参画と多文化共生』, vol.5, pp.6-19, 東北大学グローバル COE「グローバル時代の男女共同参画と多文化共生」

リースマン, キャサリン コーラー 大久保功子・宮坂道夫監訳（2014） 『人間科学のためのナラティブ研究法』 クオリティケア

安井永子(2012)「接続詞「でも」の会話分析研究 ： 悩みの語りに対する理解・共感の提示において」『名古屋大学文学部研究論集. 文学』, vol.58, pp.89-102, 名古屋大学文学部

김석란（2008）「한국사회적응프로그램과 일본여성의 한국생활관」 『일어일문학』, Vol.40, Issue.40, pp.205-203

노지영/정진경/정혜온/박정의 (2014) 「일본인결혼이주여성의 문화적 정체성이 자녀 양육에 미치는 영향」, 『일본언어문화』, pp.563-586, 한국일본언어문화학회

민서정（2013)『연애결혼 이민자 여성의 양육경험에 관한 애러티브 탐구』, 숙명여자대학교 대학원 아동복지학과 아동심리치료전공, 2013, 박사학위논문

이지선/천혜정（2008）「한국남성과 연애 결혼한 일본여성의 한국결혼생활적응의 의미에 관한연구」 『한국가족관계학회지』, Vol.13, Issue.2, pp.57-76

トランスクリプト記号

(.)	0.2 秒以下の短いポーズ	(..)	0.5 秒以下の短いポーズ
↑あ	「あ」の音が上昇イントネーション	↓あ	「あ」の音が下降イントネーション
?	疑問形の上昇イントネーション	…	言い澱みを含む間
¥--¥	笑いながらの発話（¥¥の間）	@	笑い
><	前後に比べて発話スピードが早い部分	□	分析で指摘する部分
あああ	声が前後に比べて大きい箇所（太字）	[	発話の重複の開始箇所（ペアを数字で表記）
°ああ°	声が前後に比べて小さい箇所	=	二つの発話が途切れずに発せられた場所
:	音の引き伸ばし（:の数が長さを表す）	[H H]	息混じりの発話
( )	状況説明	hh	笑い声
＿＿＿	強調的に発音される箇所（下線部）		